



塔のある学校から

令和3年度 第9号
美瑛町立美馬牛小学校
令和3年12月24日発行

校長の思い込み

校長 岸田 賢治

保護者の皆様、地域の皆様、日頃より本校の教育活動にご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

学力に影響を与える要因

影響度の高い要因

- ・ 3位：指導改善のための形成的評価
- ・ 6位：学級での児童生徒の行動
- ・ 8位：教師の明瞭さ
- ・ 10位：フィードバック
- ・ 12位：分散学習と集中学習
- ・ 13位：メタ認知方略
- ・ 14位：過去の学力
- ・ 23位：授業方略
- ・ 31位：家庭環境
- ・ 36位：ピア・チューターリング
- ・ 52位：動機づけ

学力に影響を与える要因

影響度の低い（負の）要因

- ・ 86位：探究的指導
- ・ 88位：宿題
- ・ 105位：学校全体で取り組む授業改善
- ・ 106位：学級規模
- ・ 111位：協働指導・チームティーチング
- ・ 124位：教員養成
- ・ 125位：教師の教科内容の知識
- ・ 132位：学習者自身による学習の管理
- ・ 135位：生活保護
- ・ 137位：テレビ視聴

タイトルは「校長の思い込み」ですが、私（岸田）の思い込みです。勘違いと言っても良いかもしれません。

子どもの生きる力を育てること、それが学校の大切な目的です。とりわけ、子どもに学力をつける、ということは大事です。上の表は教育学研究者でオーストラリアの大学教授、ジョン・ハッティ氏の著作の翻訳版から引用したものです。学力に影響を与える要因として1位から138位まであるのですが、日本の教育制度に合わないものを除き、さらにその中から主なものを選んでいきます。例えば、3位の指導改善のための形成的評価ですが、形成的評価とは、授業を行い、その結果、子どもにどんな力が付いたのか、あるいは、どんなことでつまづいているのかを調べ、それらに基づいて授業法を改善していくことです。これには私も同感で授業者自身が分析し、気付くということが学力向上にはとても大事だと考えています。

私は以前から125位の教師の教科内容の知識、これこそが最も大事で、これなしで子どもの学力など付くはずがないと思っていました。それがこんな低い順位とは。さらに宿題、学校全体で取り組む授業改善、協働指導・チームティーチング、学級規模（少人数指導や習熟度別授業）も学力への影響がほとんどないとこの本で言われてしまいました。もちろん、海外での研究結果ですから、それがそのまま日本の学校の事情に合うものとは言いきれません。しかし、全員に一律の宿題を出してもあまり効果はありませんし、学校全体で取り組む授業改善と言いつつ、研究授業では、その場だけ校内研究に合わせたり、子どもの力を伸ばすこととはほど遠い授業もこれまで数多く見てきました。これらすべて効果がないと言うわけではありません。やり方によってはとても効果があるのです。要は根本となる理論と証拠・根拠（エビデンス）に基づいた指導が実践されているかどうかなのです。

14位の過去の学力、31位の家庭環境が要因として大きいのも正直なところ、皆様も感じていると思います。しかし、家庭の状況や子ども本人の学力以上に、学力への影響が強い要因のほうが多いのです。形成的評価以外にも、教師の明瞭さ、フィードバック、分散学習と集中学習、メタ認知方略、授業方略（個別的な学習と協働的な学習）などの要因も影響度が高いのです。

子どもの学力を伸ばしている先生は、こういう要因を経験則で身につけているのです。子どもに力をつけているのですから方法は正しいのです。しかし、その経験則が理論的に正しいのか、証拠・根拠（エビデンス）に基づいた指導かどうかというのは学校現場ではなかなかわかりません。わからないというか、理論を勉強する時間を確保することが難しいというのが現状です。時間の確保、そのために行き着くところは「働き方改革」だということを皆様ご理解ください。

